Y4-9

浜松赤十字病院における患者図書室の活動

浜松赤十字病院　図書室
○飯田（いいだ）　育子（いくこ）

患者の知る権利、インフォームド・コンセント、治療の選択など、患者主体の医療の推進により、自分の病気についての医学情報を入手したいという患者の要望も高まってきている。このような背景の中、病院で患者や家族に健康情報や医学情報を提供する、患者図書室の活動が活発になってきた。浜松赤十字病院では、1999年3月から患者図書室の活動を始めた。常設場所が得られなかったため、週1回外来近くの多目的室に、医学図書室の司書が病気や治療についてやさしく書かれた健康図書、健康雑誌などを運び、午後2時間開室した。利用対象は入院患者と家族で、資料の閲覧と貸出を行った。また、緩和ケアや糖尿病のチームに患者図書室から資料を提供した。2007年11月に、病院が郊外に新築移転した。新病院では今までの活動を踏まえて、医学図書室の中に患者図書閲覧コーナーを作り公開することになった。同年12月から病院の開院日に開室し、入院患者や家族だけでなく、外来患者やお見舞いの方、健診の方などにも幅広く利用してもらえるようになった。また、インターネットで病気の検索ができる患者専用のパソコンや、自由に持ち帰ることができる、病気や治療について書かれたパンフレットも用意した。しかし患者用の図書が不足していたため、NPO「医療の質に関する研究会」の「患者図書室プロジェクト―みんなの医療情報AからZまで」の全国公募に応募し、2008年度寄附対象の10施設に選ばれた。そしてこのプロジェクトから、患者用の図書や家具などを沢山寄贈してもらうことになった。木製家具や新しい図書を揃えた患者図書室は、6月26日にリニューアルオープンする予定であるが、今後一層充実したサービスができるものと期待している。患者図書室からの健康情報や医学情報の提供は、病院が地域医療に貢献できる大切な活動の一つであると思う。

Y4-10

整形外科「痛みの教室」による患者教育

名古屋第一赤十字病院　整形外科[1)]、
名古屋第一赤十字病院　リハビリテーション科[2)]、
名古屋第二赤十字病院　整形外科[3)]
○大澤（おおさわ）　良充（よしみつ）[1)]、古川　和親[2)]、中村　和司[2)]、
佐藤　公治[3)]

【はじめに】1996年から日赤腰痛教室を開催した。1998年からは対象疾患を整形外科慢性疼痛疾患に広げ整形外科「痛みの教室」と改名した。整形外科「痛みの教室」は退行変性が根底にある慢性疼痛疾患の正しい知識の普及と、痛みとの上手な付き合い方を知ってもらうための勉強会である。

【背景】1.整形外科疾患の多くは老化現象が根底にある慢性疼痛疾患であり、痛みは完治することがないので一生付き合って行く必要がある。2.氾濫しているマスメディアやインターネットの情報から、患者さんが正しい情報の選択することは難しい。3.痛みの感じ方や治療効果には個人差があるので、自分にあった痛みの対処法を知る必要がある。4.自分の病気が分からないと有効な治療ができないし楽しい人生が送れない…などの理由からこの勉強会を行ってきた。

【実際】痛みの教室は1.医師による疾患の解説、2.PT,OTによる運動療法の実演、3.質疑応答が基本であるが、入院治療が必要な疾患では看護師による話もある。運動療法はその場で可能な運動を参加者にも実際に行ってもらう。対象疾患は頚椎・腰椎の脊椎変性疾患、四肢の変形性関節症、骨粗鬆関連疾患などである。保存的治療では運動療法・物理療法・薬物療法・装具療法などの治療法を提示し、その中から自分にあった治療法を見つけてもらう。また手術療法では良い面だけでなく、表に出にくい合併症・後遺症の話や、最先端治療の紹介もしている。また地域連携による急性期治療、慢性期治療の役割分担の話なども行い、地域完結型医療の必要性を説いている。定員250名、約2時間の勉強会を当院のスタッフで年4回行ってきたが、2006年からは名古屋第二赤十字病院と共同開催している。